

なのはにならないと

すどうりな

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死に生まれ変わった先は高町家。

『なのは』になってしまった私は己に立ちはだかるであろう脅威に向かって覚悟を決めていたんだけど……あれ？ もしかして私って主人公じゃない？

『なのは』であろうと頑張る、そんな私のストーリー。

目次

私が始まった日	前編	1
私が始まった日	後編	11
それは場違いな私なの		23
実技試験はハードなの!?		33
初登校はドキドキなの		44

私が始まった日 前編

『高町なのは』……ソレが私の名前だ。

海鳴市に両親と兄、姉とともに暮らしている。3人兄妹の末っ子で姉とは8歳、兄とは10歳も離れている。

通っていた小学校の名前は私立聖祥大学付属小学校、ある事情によりごく普通の女の子だったとは口が割けても言えないが見た目だけなら普通の女の子だったに違いない。

……さて、ここまで話さずとも漫画やアニメの魔法少女と呼ばれるジャンルが好きなら気付いているかも知れない。

そう、私は『魔法少女リリカルなのは』という物語の主人公である『高町なのは』と同じような……。否、全く同じ環境と全く同じ容姿を持って生まれ直してきた人間であった。

生まれ直してきたと言うからには前世うんぬん、そう言う記憶も知識もちやんと覚えていた。記憶とは脳に書き込まれているなどと考えていた私には到底想像できる筈もない事だが事実は現実である。ただただ混乱していた一歳。

夢だと考えていた二歳。

夢であって欲しいと考えた三歳。

現実だと気づいた四歳。

訪れるであろう未来に恐怖した五歳。

諦め……。覚悟を決めたのは五歳の後半の出来事だった。

主人公であろう。物語の彼女の様に強く、皆を守るくらい強くあろう……。今思えばあの頃から私は主人公『高町なのは』を目指していたのかも知れない。

強くあろうと生まれながらの運動オンチだって人外染みた(家族にこう言うのもアレだが他に表現出来ない)父のもとで必死に努力した。

マルチタスクと呼ばれる魔導師特有の分割思考だって必死に覚え
た。

イメージトレーニングだって忘れない。来るべき戦いに備えてア

ニメや小説、漫画の描写から訓練を重ねてきたのだ。

『高町なのは』と同じように、アリサちゃんとすずかちゃんの友達にだって成れた。だから私はきつと全てが私の知識通りに行っていると勘違いしていたんだ。

運命の小学校三年生、私は毎日の様に来る日も来る日も待っていた。異世界から少年が私に魔法の力を渡しに来るのを。

原作にあった会話だって聞いた、原作にあった出来事だって見た……でも待っても待っても彼は現れなかった。

翌年、小学校四年生……ある事件が起きた。

『白騎士事件』全世界から日本に向けられて発射されたミサイルを白騎士と呼ばれた何者かが切り伏せた事件だ。

原作、魔法少女リリカルなのはには無い出来事に私の頭は混乱していたが少し原作と違うだけだとそう思い込もうとした。

無理矢理にでも思い込もうとして……彼女が現れた。

私は原作で見た彼女が転入して来たのを見て漸く諦めがつき始めたのかも知れない。

フェイト・テストアロッサ……一年前に私が魔法という切っ掛けで友達になっていなければならぬ少女だ。

テレビでは発明家と言えば二番目にあがる天才の娘……勿論クローンという設定も無ければ魔法少女でもない。

所詮、現実と物語の区別がついていない……馬鹿の勘違いだったのだ。

「なのは……なのは？」

「あ……ごめん、寝ちゃったみたい」

肩を叩かれて目を覚ます、叩かれた方をみればフェイトちゃんの顔があった。

始めて見た時から余り変わっていない優しそうな赤い目だ。顔もモデルさんやアイドルなんて目じゃないくらい可愛く、綺麗になっ

ていた。

学校内で密かに行われていたお嫁にしたいランキング三年間連続一位（因みに私は6位）は伊達では無い、私だって今世も男だったらきつと告白していたに違いないくらい的美少女だ。

私はボンヤリとしていた頭を振って目を完全に覚まさせた。

車の窓から外を見れば大きな会社が見えていた、今日見学させて貰う会社『A & a m p ; F』だ。

何処ぞの超兵器なんかよりもよっぽど一般人に馴染み深くなった機械を作っている会社で…… フェイトちゃんのお母さんの会社だった。

「なのは、やっぱり昨日も夜遅くまで練習してたの……？」

「あ、あはは…… うん」

「はあ、あんまり無理したらもとももないんだよ……？」

「はい……」

フェイトちゃんは本当かなあ？ と言いたげな疑う様な目で私を見てきた。 まあ、守る気はさらさら無いが。

妄想少女の大きなツケが今帰って来たのだ。

うちの喫茶店を継ぐというのが私の夢だ。

私自身そういった事に興味があるのは勿論だが…… 小さな頃に、特に小学校時代に散々迷惑をかけた両親に恩返しをしたいからという気持ちの方も大きい。

でもお菓子作りなんてあんまりしたことがない私にできる程お菓子作りの道は甘くなかった。

お母さんやお父さんに教えて貰いながら夜遅くまで練習しているのだが…… ものになるにはまだまだ時間がかかりそうだ。

小学校時代をやり直せたらなあ、と今思っても後の祭であった。

「それにしてもなのはがいきなり『デバイス』を見せて欲しいなんて言うとは思わなかったかな……」

「え？ どうして？」

「中学校に上がってからのなのははお菓子作りに没頭して『デバイス』なんて興味なさそうだったから」

「あー…………… 確かに、そうだったかも。でもフェイトちゃんのアレを見せられたらなんと言うか…………… こう……………」

「小学校時代の魔法少女熱が戻って来ちゃった?」

「にやはは…………… やめてよ恥ずかしいから」

小学校時代の黒歴史を掘り出されてしまい顔が赤くなる。

『デバイス』、A & a m p ; F が某超兵器の発表と同時に売り出した携帯できるマルチサポートシステムだ。

魔法少女リリカルなのはにも出てきた機械で、本人の魔法行使を補助する物だが…………… やはり現実と物語は違う。

魔法見たいな超兵器は確かにあるし、このデバイスにも魔法染みた力はある…………… でもやっぱりこれはただの機械だ、魔法じゃない。

昔の私はこのデバイスを毛嫌いしていた。

まるで此処はお前の知っている世界じゃないぞ妄想女、と呼ばれている様な気がしたからだ。 実際にはそれこそが妄想に過ぎなかったのだが。

気持ちの切り替え、新しいスタートを切る為の切っ掛けとして私はデバイスが欲しかったのだ。

未練がましいがデバイスにつける名前だってもう決めているくらいには本気だった。

車をおり社内へと進んでいくと受付の人がやや緊張したように私達を案内してくれた。

たかが中学生に其処まで緊張する事は無いのに…………… と疑問に思ったが受付の人の視線を見て納得する。

確かに、社長の娘を案内するんだから緊張して当然だった。

思わず漏れてしまった笑いにフェイトちゃんの顔がキョトンとしてしまうが何でもないと言って誤魔化した。

「ごめんねなのは。こんなに大事になっちゃて…………… 本当は私が学校の帰り道とかで渡せれば良かったんだけどお母さんが張り切っちゃって……………」

「ううん、すっごくうれしいよ。 デバイスをプレゼントしてくれ

るだけでも有難いのに会社の中を見学できるなんて今だって夢みただと思ってるんだから」

「良かった……」

フェイトちゃんは受付の人にもとの位置に戻っても良いよと告げてエレベーターを操作する。向かう階は最上階の社長室だ。

少し緊張してきた……。なにせ会うのは初めてだからだ、仕事に忙しいらしくフェイトちゃんもあんまり会う事は出来ないらしい。

原作のアノ姿を思い出し余計に緊張が増す。原作魔法少女リリカルなのはでは彼女は娘、アリシア・テストアロッサの死を認めず生き返らせようと狂気に染まってしまった科学者兼ラスボスだったのだから。

……。何をまた私は馬鹿な事を。

自分の中に浮かんだ考えを否定する。此処は現実で魔法少女リリカルなのはの世界なんかじゃない、いい加減現実を妄想のフィルターがかかった目線で見ってしまう癖をどうにかしなければなりない……。このままでは私は何時まで経っても……。

——ポーン

エレベーターが止まる音で私の思考は中断された、外に出れば待っていたのは長い廊下だ。

フェイトちゃんに引かれる様に長い廊下を歩き、やがて大きな扉の前で止まった。恐らく此処にフェイトちゃんのお母さんがいるのだろう、ゆつくりと深呼吸して気持ちを落ち着かせる。

うん、大丈夫。

フェイトちゃんが扉に手をかけて——

「フェイト……！」

——勢い良く扉から出てきた誰かに抱き締められていた。

「……え？」

ぎゅぎゅうつと言う音が聞こえて来そうな位にその誰かに抱き締められたフェイトちゃんはちよつと苦しそうにしながらも照れていた。

「は、恥ずかしいよ…………… 母さん」

「私はぜんっぜん！ 恥ずかしくないわよフェイトー！」

私の事なんて視界には無い物だと言わんばかりに満面の笑みでフェイトちゃんに頬擦りする彼女に私の思考は一時停止してしまう。

…………… 誰だコレは。

プレシア・テスタロッサ、フェイトちゃんのお母さんでA & a m p ; Fの社長。 今では全世界に浸透したデバイスを発明した人物でもある。

違う、そんなことは解っている。

こう…………… 私の知識の中では彼女はフェイトちゃんの事をこれでもかというくらい嫌っていた筈だ。

勿論、現実と原作は違うと解っているつもりではいた…………… でも。

これは予想出来ない位の親馬鹿ではないだろうか。

「母さん…………… なのも見てるよ……………」

「見せつける位で丁度良いのよフェイト！ 従業員に見せ付けるなんて何時もの事じゃない！ ああ…………… やっぱ本物のフェイトじゃなきゃ駄目よね！ アリシアとはあんまり会えなくなっちゃった分の愛娘成分を今補給しないとお母さん倒れちゃいそうで…………… ？ なのは何？」

「えーつと…………… お気遣いなく……………」

物凄く名残惜しそうにフェイトちゃんから視線を外した彼女は暫くジツと私を見つめる。 そしてこれまた名残惜しそうにフェイトちゃんを放すと何事もなかった様に私に微笑んだ。

「高町なのはちゃんね、フェイトから何時もお話を聞いているわ…………… 何時もうちのフェイトが御世話になってます」

「い、いえ此方こそ何時も御世話になりっぱなしで……………」

まるで絵の中の人の様だと思った。 髪の色こそ違いますが顔立ちは何処か似ている、可愛いというよりも綺麗な人だった。 フェイトちゃんの母というのも納得だ。

知識抜きにしても近寄り難いくらい綺麗な人だと感じた……………

先程のアレが無ければだが。

こうして話している今もフェイトちゃんの手を決して放そうとしていないあたり相当な親馬鹿だ……原作を知っている私としては少々複雑な気持ちだったが。

◇◇◇◇◇

「すっごい……」

「よく町中でも見る機種でしょう？ 此処で驚いていたら後まで持たないわよ？」

プレシアさんは会社の中のある場所を案内してくれていた。先日発売されたばかりの最新式から私がまだ小学生の頃に発売された初期のデバイスまでズラリと並んでいる光景には圧倒される。

プレシアさんの言う通り、視界に映る機種は皆何処かで見たとのことのあるデバイスだったが私が驚いたのはその数、壁一面にデバイスが並べられているのだ。

「年代順に並べてあるのよ、入口近くは最初の方で奥に進むほど新しくなっていくの」

プレシアさんは立ち止まらず更に奥の扉を開いてその先へ進んでいく。奥の部屋にもデバイスがズラリと並んでいたが先程までのデバイスとは違いハンマーに剣、銃や盾など何処か恐い印象を受ける形だった。

「其所にあるのはオーダーメイド、もしくは軍用のデバイスよ。」

軍用のデバイスは待機状態が無いの、そういう物を搭載するよりも殺傷能力や防衛能力を上げて少しでも地位をコレで回復させたいんでしょう、一応アレに通用するものもあると言えば……中学生にする話ではなかったわね、次に行きましょう」

更に更に奥へプレシアさんはどんどん進んでいく。

途中原作でも見たような戦闘向けのデバイスを見て懐かしい気分になるが、フェイトちゃんが置いていかれそうなくらい距離が空いているの教えてくれて急いで追いかけた。

「そして此処が、まだ世に出回っていないデバイスを開発している……所謂作業場よ」

扉を開けた先には巨大な部屋が…… 否、工場があった。

沢山の人が慌ただしく動いていて見たこともないようなデバイスや機械を囲み議論を交わしている。

「問題はエネルギーだ、これを維持し続けるためのエネルギーが……」

「いつそのこと展開する範囲を狭めてはどうだろうか？」

「いやしかしそれではデバイスである意味がない、BJは軽くコンパクトに尚且つ安全第一だ、それではBJの本来の性能とは言いがたい……」

「やはり現状ではアレに頼らなければ……」

「なんとも癪にさわる事ですが……」

…… もしかして、聞いたら不味い話を聞いているのではないだろうか？

「大丈夫よ、此処で本当に聞かれて不味い話をする事なんてまれよ」

「そうなんですか……」

まれにはするんだ……

時折耳に入ってくる精神衛生上良くない周りの会話を聞こえない振りをしてプレシアさんに着いていく。

周りを見れば街で見たことは無いが前世の知識で見たことがあるようなデバイスもちらほら見えて…… これは見ない振りもした方が良いのかも知れない。

どれくらい歩いただろうか？

周りをあれだけ走り回り、そこから中で議論を交わしていた研究員も何時の間にか居なくなっていた。

その代わりに通路の壁全てを埋め尽くす謎の機械、チカチカと様々な光が点滅していて目が痛くなりそうだ。 いったい何の機械なのだろう……

「すごいでしょう。 それ、デバイスよ」

「でもデバイスってもっと小さい物じゃ……」

「デバイスは基本的には演算機、大きな物があっても不思議じゃないでしょう？」

思わず周りの機械を凝視してしまう。やはり私の前世の知識による先入観は捨てるべきなのだろう。

これだけ巨大なデバイスが一体何を演算しているのかは気になるが通路の先にあった物を見てそういった思考は全て止まってしまった。

巨大なデバイスから伸びる複数のコードは全てソレの台座に繋がれていた。

ソレはルビーの様に赤く透き通っていた。

ソレは光沢を放ち、丸く小さかった。

ソレは簡単に表現するならば赤いビー玉のようだ、しかし私は知っている。

アレはデバイスだ。

アレはデバイスだ。

アレはデバイスだ。

単なるビー玉ではない、距離も離れ起動している訳ではない……しかしアレはデバイスだ。

私はデバイスについて詳しい訳ではないし未来予知染みた直感を持つ訳でもないがアレを私が見間違える事など有り得ない。

高町なのはがソレを見間違えるなど有り得ない。

アレを知っていた。アレが欲しかった。

私はあの日あの時からアレを手に入れる日を待ち望んでいたのだ。アレの名は……私が待ち望んでいたアレの名前は……。

「レイジング………ハート………」

私はきつと此処から始まったのだ。

何年経つても私はこの日を忘れないに違いない。

私がレイジングハートを手にいれたこの日を。

私の覚悟は妄想なんかじゃ無かったと確信したこの日を。

私が胸を張って『高町なのは』と名乗れる様になったこの日

を.....
。

私が始まった日 後編

それは唐突に、本当に唐突にやって来た。
プレシアさんが私のデバイスに私を持ち主であると認識するためのデータを入力しようとした瞬間の出来事だ。

背後から大きな音を聞き、振り返って見れば台座に繋がれた巨大なデバイスの一部が突然弾け跳んでいるところだった。

軽自動車程もあるデバイスが反対側の壁に激突し部品を撒き散らす、何事かと目を見開いて通路をよく見てみれば大きな横穴が空き……… 銀が見えた。

穴からは人間の腕を無理矢理大きくしたような不出来な手を持つ銀色のナニかが這い出して来ていた。

ナニかの体は半分以上が壁の向こう側だったが明らかに私達の大さをこえている………。

鋼の様に銀色に光るナニかはその単眼で私を見つめ、何かを考える様に首を傾げるとその巨大な手を此方に伸ばして来ていた。

「レイジンググハートっ！」

私は駆け出し赤いビー玉の様なデバイスを握り締める。

守ろうとしたんだ。私だけのデバイスを、私だけの可能性を、
高町なのは主人公に成れる可能性を。

プレシアさんの叫びが聞こえる。

レイジンググハートは起動しない。

巨大な手の陰が私を覆いつくす。

レイジンググハートは起動しない。

銀色の死が目前まで迫っている。

レイジンググハートは起動しない。

そして――

《Thunder Smasher》

——雷が落ちた。　そう比喻するのがもつとも適しているに違いない……断言できる程に眩い神速の一撃が凄まじい音を発して発射された。

背後を見れば其所にいたのは黒いマントを柵引かせた私の親友の姿があった。

腕には似合わないくらい巨大な銃を構え、僅かに宙に浮くフェイトちゃんは振り返り私をみて微笑んだ。

「間に合って良かった……なのはは此処に居て……大丈夫、こう見えてもA&Amp;Fのテストパイロットなんだよ？　あんなのなんかに負けない、いくよバルディッシュ」

《Yes sir》

手を伸ばした、捕まえられないと解つていながら手を伸ばした。

手は彼女に掠りもせず、彼女は新たに現れた黒い機械的な斧を持ち、まるで蝙蝠の翼の様なマントを柵引かせて飛び出してしまふ。

超兵器とデバイスを纏い、音を越えてまるで雷のように突き進む彼女を止める術なんて……私には無かった。

フェイトちゃんの持つているデバイス『バルディッシュ』にはある特別な超兵器が搭載されている。　いや、超兵器にバルディッシュを搭載していると言った方が正しいかも知れない。

インフィニット・ストラトス
I S

宇宙空間での活動を想定し開発されたマルチフォーム・スーツ。

開発当初は注目されなかったらしいけど、私が小学校四年生の頃に起こった『白騎士事件』によって世界中に知れ渡った超兵器だ。

当時デバイスが世界中に知れ渡った陰に埋もれてしまったISの存在は『白騎士事件』により日の目を浴びる事になった。　現在の兵器を遥か彼方に置き去りにする性能を持つISはそのままデバイスすら、そして開発者の願いすら置き去りにして最強の兵器と呼ばれる様になる。

女性にしか乗れないという欠点故に女尊男卑という物が産まれてしまう程、世界はISに染まっていった。

デバイスがISと張り合える部分は演算能力と男性も装備できるという位のモノ、需要は無くならないが今よりも確実に減るのは確かだと思われていた……。しかしそうはならなかったのだ。

開発者であり製造法を知る唯一無二の人物『篠ノ之 束』の失踪と共にISの絶対数が決まってしまったからだだった。

その数468機。

ISが現れる前の各国や企業のパワーバランスを見て公平に分配されたIS……。各国はISを研究するための周辺機器としてデバイスを活用し始めたのだ。

そしてそのデバイスを開発した企業がISを所持出来ない筈がなく、実際にフェイトちゃんのデバイスには組み込まれていた。

最強の兵器であるISと最高の演算機であるデバイスを持ったフェイトちゃんが負ける筈は無い。プレシアさんだつてきつと戦闘用のデバイスを持っているからこそあの場に残ったのだ。

それなのに、それなのに……。どうしてこんなに胸騒ぎがするのだろうか。

「足を止めないでくださいー！」

「はっ、はいー！」

鬼気迫る表情をした職員さんに怒鳴られてしまう。

どうやら考えるあまり足が止まってしまった様だ、この非常事態にそんなことをされては怒られてしまうのも当然だろう。

私はもう一度だけフェイトちゃんとプレシアさんがいるであろう方向を見る、本当に大丈夫なのだろうかという疑問が身体の中を駆け巡るが必死に感情を押しさえつけ脚を動かした。

落ち着け高町なのは、お前が行った所で何ができる。

レイジングハートは戦闘用のデバイスとは限らないしそもそも起動すら出来ない。

超兵器
ISなんて私は持ってないし持てる筈もない。

私にできる事なんて何にも無いのだ、私が行った所で迷惑になるだけなのは間違い無い事だった。

大勢の職員さん達と共に長い通路を走って移動する。目の前に見えてきたのは今まさに閉められようとしている巨大な扉だった。

「まだ後ろに誰かいるか!？」

「私達の一団が最後です!」

短い言葉だが行われる問答、一度閉まればまるで壁の様にしか見えないだろう堅牢な扉。

職員さん達は我先にと扉の向こう側へ移動する、扉を見ればゆつくりと閉まっていく最中だ。

行ったらもう戻れないだろう。

「貴女も速く! 死にたいの!？」

ぐいっと力強く腕が引つ張られた、どうやら扉をくぐっていないのは腕を引つ張った職員さんと私だけの様だ。

扉はもう半分以上が閉まっている、大勢の職員さんの私を呼ぶ声が聞こえる。

私は…………… 私は……………

『高町なのは』は無駄だから、無理だからと言って友達を置き去りにするような『主人公』か？

職員さんを扉の向こう側に突き飛ばした。

信じられないという顔をして扉の向こう側から此方を見詰める職員さんに心の中で謝り、来た道を走って引き返す。

『高町なのは』はフェイトちゃんを置き去りに一人だけ安全な場所にいる事を善しとはしない、絶対に。

左手に持っていたレイジングハートを懐に仕舞い込み全力で走る。

後ろで聞こえた私を呼ぶ声や扉の閉まる大きな音を全て無視して走る。

走りながら壁に掛けてあった拳銃の様な軍用のデバイスを拾い中身を確認した。元々こう言う事態を想定して此処にあった物なのか弾は装填されている。

「セットアップ」

デバイスを起動すれば僅かに身体が軽くなった。

筋力の補助という機能でもあったのかも知れない、何にせよこれを好機と速度を上げる。

角を勢い良く曲がり、大きな何かの部品を飛び越えフェイトちゃんとは別れた場所を目指す。行って何ができると言う考えはもう頭に無く、ただ行かなければならないという考えが頭を支配していた。

何かが先で暴れている様な音が響いてきた。恐らくはもう少しで…… デバイスを両手で構えながら前を警戒して進む。構えなんて刑事ドラマのモノの見よう見まねだ、何もしないよりむしろう程度のものでしかない。

暫く前に進めば扉があった、扉に付けられた小さな窓からは何かの影がチラチラと見えている。

扉を僅かに開けて中の様子を伺った。

……… 何もいない？

扉の向こう側には何も居なかったのだ、そんな筈は無いと扉を開けて中に入り確認する。

此処に来る時にも通った広い部屋だ。部屋の中身は殺風景で目立つ物は入口以外にも扉が二つある程度だ、確か片方はレイジングハートのあった通路へ行く為の最後の扉だった様な気がするが辺りには音が出せる様な物なんて無い。

「音がした……… 筈なんだけど………」

あの影は見間違いで暴れていた音はもつと先の音だったのかと考えて先に歩を進めようとする……… そんな時、それに気付いた。

私を覆う巨大な影に。

全力で前に走りながら後ろに発砲する、振り替えて見れば見えたのはあの銀の化物だ。

化物は天井に……正しくは入口の真上に張り付いていたのだ！
銀の化物はそんな物は効かないと言わんばかりに此処に腕を伸ばして私を殴り跳ばそうとしている。

「あぐっ!?!」

咄嗟に前方につきだしたデバイスが粉々に粉碎され私は宙に浮いた。

直後背中に走る大きな衝撃、扉を突き破ったのであろう私の身体は扉以上に固い何か当たって止まる。

前を見れば銀の化物がゆっくりと此方に歩んで来ている最中だった。

赤く光る三つの目が私を見つめ一体目と同じ様に首を傾げる。

先程見たのは目が一つだった筈なので別の個体だろう……多分フェイトちゃんはまだ何処かで一つ目の化物と戦っているのだ。

少し安心する、これももし一つ目の方だったらフェイトちゃんが■んでしまったのかも知れないからだ。

「友達の……心配してる場合じゃない……かな」

今、この瞬間にも化物はまるで私の死のカウントダウンの様に歩を進めている。

逃げようと脚に力を入れるが頭の中がグワングワンと揺れていて上手く立ち上がれない。

こんな所で■ぬのは……『高町なのは』への侮辱以外の何物でも無いと、後ろにあった何かにしがみつき必死に立ち上がる。

どうにか中腰まで立ち上がり、其処から更に立ち上がろうと脚に力を入れてソレが目に入る。

金色のプレート……いや、私の目に付いたのは其所ではないプレートに刻まれた数字だ。

『4608』

私の勘違いでなければこれはきつと起死回生の切り札になるに違いない、脚すら満足に動かないこの状況……これが動かなければ私を待っているのは■だけだ。

お守りの様に懐から取り出した赤いビー玉の様なデバイスを左手に握り締め、右手で金色のプレートを手取る。

起動の仕方なんて一切解らない、それでも私は言葉を紡ぐ。

私の言葉を、きつと私だけの起動呪文を。

「我、使命を受けし者なり」

現実は何処まで行っても現実で、馬鹿な妄想だ、有り得ない空想だ、そんなことは解っている。

「契約のもと、その力を解き放て」

思い上がりだと、私なんかじゃ絶対に成れないというのも解っている。勝手に妄想して、勝手に受け入れて、勝手に捨てて………そして今、勝手に頼っている。

「風は空に、星は天に、そして不屈の魂はこの胸に」

中途半端、何もかも中途半端、結局妄想少女が最後に逃げ込むのは妄想の中でこうして呪文を紡いでいるのもただの現実逃避の一つに過ぎないのかも知れない。不屈の魂なんて………私には在る筈ない。

「この手に魔法を」

それでも、それでも私は言葉を紡ぐ。

祈る様に、願う様に、継る様に。

間違いであっても良い、偽りであっても構わない。

「レイジングハート、セットアップ！」

間違いでも偽りでも、妄想でも空想でも幻想でも……私
は……。

『高町なのは』でなければならない。



心配だった。

私は、フェイト・テスタロッサは心配で心配で堪らなかった。

場所は屋外、相對するはまるで水銀を人形に固めた様な奇妙な化
物。

「バルデイツシュ！」

銀の化物が此方に伸ばしてきたその巨大な腕を切り裂きそのまま
怪物を一刀両断する。

上半身と下半身に別れて尚動こうとする怪物の至近距離に近づき
ある武装を取り出す。

私の武装の中でも一際大きな武装、先程怪物に放った
サンダースマッシュヤー
大型レールガンの二倍はあろうかという巨大な発射口が私の背に装
着される。

《Thunder Rage》

轟音。バルデイツシュの残存エネルギーの半分を食らいつくし
て発射されたそれは雷だ。電気を自在に操る第3世代兵器により
繰り出された雷撃は銀の化物を跡形もなく焼き付くした。

一先ずは安心だろう、銀の化物は消滅し危機は去ったのだ。

……なののが戻って来なくて良かった。

心配していたのは私が連れてきていた親友の事だ、高町なのは、私
がこの町に引越してきて初めて出来た友達。

出会った時の印象は、正直変な女の子だったと思う。

魔法だのなんだのと言ったファンタジーが大好きで自分が勝手に
作ったのであろう設定を私に話してきて最初はとても戸惑った。

何でも彼女の中では私は雷を使う漆黒の魔導士だったらいい……今それに近い力を使える事はただの偶然だろうが。

なにか辛い事があつたら私に相談してね!、と真剣な顔で言われた事もあつたがまあ彼女だから仕方無いだろう。きつと彼女の中では私は心に闇を抱えた魔導士みたいな設定だったに違いない。

流星に中学校では無くなったが男子の前でも平気で着替える癖もなのは変な子だと思ふのに拍車をかけていた様な気がする。男子の前で着替えようとする度にアリサやすずかに怒られていた。

なのはは私から見て変な子だった、でも、一番私を見てくれたのもなのはだった。

私はプレシア・テストアロツサの娘だ、今となつてはテストアロツサの名を知らない人はいないし私に近づいてくる人は大抵がテストアロツサの名前しか見ていない。

小学校時代でさえテストアロツサの名の影響は大きく先生は何時も私の顔色を見ているし生徒は皆私を避けていた。

でも、なのはは違つた。

彼女は私が転校してきて直ぐに話しかけてくれた、話の内容は魔法少女の事ばかり……。しかも意味の解らない物も多かったがキチンと私を見て話してくれていたのだ。

なのはとの繋がり、其処からアリサやすずかとも友達になつて、クルスの皆とも友達になれて……。なのはが居なかつたらきつと今の私は無かつたと思う。

欠点をあげるとすればやはり魔法少女関連だろう……。今でこそ成りを潜めたが昔は不思議な事やそういつた有りがちなシチュエーションには決まつて首を突っ込んでいたのだ、まるで誰かに急かされる様に。

謎の敵、立ち向かつた友達、見ているだけのなのは。

今回は条件が整い過ぎていた。いくら成りを潜めたとは言えあまりにも整い過ぎた条件に私は何時なのはが引き返してくるのかとひやひやしっぱなしだったのだ。

「取り合えず母さんに報告しないと……」

回線を開いて母さんに報告しようとした時だった、いきなり母さんの方から通信がかかってきたのだ。

母さんから告げられた事実は私を焦らせるには充分すぎるものだったのだ。

それは二匹目の化物の目撃情報、そしてなのはが引き返して来ているという職員からの報告だった。

屋内を目指し全力で機体を動かす。スピード重視の機体であるバルデイツシュ、戻るのにそう時間はかからない。

なのはと連絡をとろうとしたがそんな時間すら私には惜しい…… それに、もし連絡をとれる様な状況でなかったとすれば……。

そんな状況にあるとすればそれは私が予想しうる最悪の事態だ、化物となのはが相対すればどうなるかなんて簡単に解る。

なのはのデバイスは起動すら出来ないのだ、恐らく数秒とかからずに…… そんな考えを頭から振り払う。

そんなことが起こって…… 起こしてなるものか!!
「っ………!?!」

漸くなのはと別れた場所が見えてきた時だ、バルデイツシュが恐ろしい程のエネルギー反応を捉えた。

振り払った筈の最悪の考えが再び頭を過る。

屋内へと飛び込んだ私は全速力で反応の場所へと移動する。ほんの僅かな距離、消費は激しくそれでいて得られる結果は一秒にも満たない…… だが、私にはもうエネルギー残量すら気にならなかつた。

そして一秒にも満たない刹那の時間、私は見たんだ。

彼女から、真っ白な服に身を包んだなのはから立ち上る光の柱…… 真っ白な光の柱を。

「なの………は………?」

ガリガリと此方に銀色の丸い何かが転がってくる。視線を下げそれを確認すればそれは頭だった。赤く光る三つ目はゆつくりと

光を失っていきやがてパラパラと空気に解ける様に消えていった。
……………状況が理解出来ない。

なのはがあの銀色の化物を倒した、あのバカみたいなエネルギーのレーザーはなのはから……………正しくはなのはの持った杖のような物から立ち上っている。それは解る。

問題はどうかやってあのレーザーを打ち出しているのかだ。動かないデバイスがなにかの拍子に動き出して、なのはの身を守っていたのなら解る。だが、あの出力は有り得ない。

あの出力はまるで……………バルディッシュ^Sの様ではないか。
やがて白い光はゆっくりと細くなり消えていった。

なのはの纏っていた白い服も消えていき元の私服に戻っている……………別れる前との違いと言えばなのは本人が傷付き気絶してしまっている事と首に提げられたアクセサリーくらいだろう。

それは赤い宝石に金の装飾が付いた豪華な品だ、恐らく赤い宝石は今日渡す筈のデバイスに違いない。

そして……………デバイスを彩る金は……………

「バルディッシュ……………これって……………」

間違い無い、それはISだ。正しくそれはデバイスを登載したISの待機状態そのものだったのだ。

バルディッシュを待機状態に戻して見比べてみるが結果は変わらない、より確信が持てただけ。

確かにA & amp ; Fは多くのISを所有している……………しかし、今この会社には起動できるISなんてバルディッシュ以外に何処にもないのだ。

そう、起動できるISは。

事実気付いた時、私は立ち尽くしてしまった。

私は壊してしまったのだ、友達の夢を。

私が此処に連れてきてしまったばかりに。

彼女の両親の店を継ぐという夢を壊してしまったという罪悪感、な

のはが死なずにすんだという安心感がごちや混ぜになって……
私は瞳から流れる涙を止める事ができなかつた。

『^{出来損ない}468』番目のISを起動させたというのはそれだけ重い事だつたのだ。

それはきつと……なのはその運命を確定させてしまう程に……。

それは場違いな私なの

「……………」

私こと高町なのは今現在真っ白に燃え尽きている最中だった。

目の前に出された問題用紙には意味の解らない事ばかりが書いてあり、私は自分の自信やそういった物が崩れていく音が聞こえてきていた。

確かに、私は前世での記憶に頼りきりであまり勉強をしている方ではない。でも中学校では満点ばかり（当たり前だが）だったし、学校の授業でも解らない事は無かった（当たり前だが）。

中学校ではアリサちゃんやすずかちゃん、フェイトちゃんに並ぶくらいの高成績だったのだ……………高成績だった筈なんだけど。

チラリと前を見れば凄まじい速度で手を動かしているフェイトちゃんの後ろ姿が見えた。

問題は恐らく同じもの、此処が如何に特別な場所だからと言って此処に来た全員に違う問題を出す程努力に成果が見合わない事はしないだろう……………いや、私としてはそっちの方が精神衛生上優しいが。

耳をすまさなくても聞こえてくるカリカリと問題を解く人達の音、フェイトちゃんだけじゃない、きっと此処に来ている全員にとって当たり前の問題なのだ。

赤点少女場違いなのは……………始まりたく無かったです。

「なのは、問題はどうかだった……………？」

「あは、あはは……………キキタイ？」

「じ、実技試験の方で挽回出来るよ！」

「あれ以来乗った事はあっても動かしたことが無いんだけど……………」

「……………ゴメン」

運命を感じたあの日から時は流れ…………… 私達は自らの進路を選ぶ重要な時期に来ていた、所謂入試の時期である。 両親の喫茶店を継ぐと日々お菓子作りに励んでいた私にとっては関係の少ない時期だと思っていた。

思っていた、過去形である。

あの時に私の首に下げられていたレイジングハートの姿は私が前世の知識で知っていた物とは違い金色の装飾が施してある。 見方によつては羽根の様にも見える金色の装飾……………これが今回私が入試を受ける事になった原因だ。

『468』番目のISにレイジングハートが組み込まれて起動したあの日に全てが決まっていたらしい。

少し考えれば解ること、特に嚴重な警備もなく彼処に入れるなら誰でも簡単触れられる様な場所に普通のISが放置されている筈が無かったのだ。

468番目のIS、またの名を出来損ない。

聞いた話ではあるが、全ISの産みの親『篠ノ乃東』ですら匙を投げた欠陥品。 何をしてでも動かずデータ解析すら受け付けない完全な置物状態だったソレは殆ど嫌がらせの意味でA&Fにプレゼントされた物だったらしい。

そんな物を私が起動させてしまったから、さあ大変。

直ぐにレイジングハートは私から取り上げられ各国の有名な研究機関を転々としながら様々な調査が進められた。

私の方だって負けてはいないかも知れない。 国外には行かなかったものの血液検査を始め様々な検査を受けて体の隅々まで調べられた。

その結果、解つた事は私のIS適正がそれなりに高い…………… とう事しか解らなかつたのだから驚きだ。

468番目は以前と変わらずに一切の解析を受け付けず、起動すら出来ない。 レイジングハートにも関わらず私だけが起動出来るという研究者からすれば首を傾げることしか出来ない結果だった。

私だけにしか起動出来ないIS、逆を言えば私には起動出来るIS。ただの置物では無くなってしまったソレを放置する事は世界的に許されない事のように……ほぼ強制的に私の未来は決まってしまったのである。

「でも、IS学園……かあ……」

『IS学園』

アラスカ条約に基づいて日本に設置された、IS操縦者育成用の特殊国立高等学校。

操縦者に限らず専門のメカニックなど、ISに関連する人材を育成する為に作られた学校。日本にあるにも関わらず学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉が許されない……。なんて私からすれば難しい言葉を並べられ何処か恐いイメージをもつ学校へのチケットを渡されてしまったのだ。

今回の事が起こるまでは自分の友達が入学を目指している凄そうな学校、程度にしか知らなかった場所だ。世界中のエリート達が入学しようと必死になって日夜勉強しているのはニュースや新聞でも取り上げられていたけど……。まさか自分が入学することになるなんて夢にも思わなかった。

「……………勉強しないとなあ」

流石全世界のエリート達が入学を目指している学校なだけあって問題の難易度は桁違い、前世の知識もあまり役には立たないくらい難しい問題ばかりだった。

特にIS関係の問題は全然解らない、PIC？非限定情報共有？第2回モンド・グロッソ大会優勝者……さっぱりだった。

プレシアさん曰く「参加さえすれば眠っていようがテスト用紙を破いた挙げ句配布者に叩きつけようが合格できるわよ」という事らしい。とんだVIP待遇だ。

それでも流石に勉強を全くしないまま学校に入学してしまえば

待っているのは赤点生活、そんなのは嫌だと勉強を頑張っては見たのだが……結果はあまり変わらなかった。

「ごめんねなのは……私があの時……」

「ストツプだよ、フェイトちゃん。そのお話はすとーつぶ」

声のトーン、顔の表情、恐らく私以上に落ち込んでいる親友の口の人差し指を当てて静かにさせる。

あの日からいっつもコレだ。フェイトちゃんは私がISに関わった人生を送るしか無くなった事を心底後悔していた。

間接的な原因は確かにあるかもしれない、でも殆どは私の自業自得という奴だ。

私が勝手に首を突っ込んで勝手に起動させてしまっただけなのだからフェイトちゃんは何も悪くない。

悪いのは私とアノ銀色だけだ。

それに……

「実を言うと……ちょっとだけ嬉しかったり……」

「……え？」

信じられないといった顔で此方を見てくるフェイトちゃん。確かに両親の店を継ぐのは私の夢だったのは間違い無い……。けどフェイトちゃんは忘れてる、私の一番初めの目標を。

「空が飛んでビームが撃てるんだよ、それって魔法少女みたいじゃない？ それにフェイトちゃん達に何時でも会えるようになるし」

私の目標は皆を守る魔法少女になる事なんだから。

「……」

少しばかり長い沈黙……一応励ます為の言葉だったんだけどもしかしたら外してしまったのかも知れない。

どうにか場を和ませようと新たな話題を探し初めてくるくらいになつて、やっとフェイトちゃんは笑ってくれた。

「あはは、うん、なのはらしいや。何よりも先に魔法少女だもんね」

「にや!? 中学校に入ってからのはあんまり魔法少女魔法少女言っていないよ!」

「今だって友達に会えるより先に魔法少女が出てくるくらい魔法少女熱が戻ってきてるよ、なのは」

「だってフェイトちゃん達にはたまにしか会えなくなるところだったけど一生って訳じゃ無かったし……………うー……………」

フェイトちゃんの顔に明るさが戻っていく。その様子を見て私は心の中でガッツポーズを決め自分を褒めてあげた。やっぱりフェイトちゃんは笑顔が似合う、暗いフェイトちゃんなんて私はあんまり見たくない。

それに今言った事はただフェイトちゃんを励ます為の冗談じゃなかったりするのだ。

皆を守るくらいに強い私に成れば。

きつと私は主人公高町なのはに成れる筈だから。

実技試験当日。

IS学園の実技試験は勿論ISを操作する事だ。

起動、歩行、飛行、武装の展開、ISを操作した時に精神に異常が見られないか、全てをチェックされる。

しかしIS学園に入学を希望する子供は実に多い。全世界のエリアート女子中学生が一度に集まるのだから当然と言えば当然である、一人一人丁寧に試験をしていけばきりがないだろう。

それだけ多くのISを一度に動かしても試験官は動きを見きれないだろうし、何よりも肝心のISが全く足りない。試験内容は全てを効率良くチェック出来る物で無ければならないのだ。

「受験番号798番さん、そろそろISを展開して準備をしています。797さん、もうそろそろ試験が始まりますからね、準備は宜しいですか？」

「大丈夫です！ なんだか……………何でも出来るような気がして……………！」

結果としてIS学園が試験内容として採用したのはISを使った

模擬戦だ、受験生はISを身に纏い試験官と模擬戦を行うというのがIS学園の実技試験の内容だった。

模擬戦のフィールドからISを纏った女の子が呆然として帰ってくるのを見て受験番号797、私の番号より一つ前の彼女は飛び出して行く。身に纏っていたのら恐らく『打鉄』と呼ばれる機体だろう。武者鎧のようなその機体は安定性があり使いやすいらしいが乗った事すらない私には今一解らない。

試験を終え帰って来たのは『ラファール・リヴァイヴ』と呼ばれる機体だろう、こちらも扱い安い機体で模擬戦にはうってつけの機体らしい……そして今私が腕に握っているIS、合計三種の機体が此処にある試験会場で使われている物だ。

「セットアップ」

私が静かにそう告げるとソレが輝きはじめ、装甲が展開されていく。

いや、それは装甲と呼んでも良いのだろうか？ 私が元々着ていたどう見てもスクール水着にしか見えないIS用のパイロットスーツ、通称ISスーツを上書きする様に展開されたのは服だった。

まるでソレはコスプレの様な服だったのだ。

兵器特有の金属チックな雰囲気は何処にもなく、ISならばあつて然るべきである肩部や背部に浮遊する非固定装備が何も無い。特徴と言える様なものは大きな青いジャケットくらいの物だろう。

ISが産み出されてから初期の頃にあつた身体全体を覆う全身装甲とはまるで真逆の発想にも見え、実の所は全身装甲に通ずるソレはこう呼ばれている。

バリアジャケット
B J

シールドエネルギーや絶対防御と言ったISに初めから搭載されている防御機能とは別に搭載されている防御装置、『A&F』のIS専用の機能だ。

B Jを展開するにあたってネックであったエネルギー問題と搭乗者にのし掛かるB Jを常時展開するための桁違いの計算を、高い演算機能を持つデバイスと拡張領域のほぼ全てをB J専用のエネルギー

タンクにすることにより可能となった防衛装置。 ほぼ手持ちの武装でしか戦えない代わりに同世代では打鉄を追い抜き並び立てるモノの居ない防衛性能を誇るISだ。

名を『ブルー・ロー』と言った。

名前の由来は日曜日の買物を含む娯楽、飲酒、労働を規制する法律の事らしいが…… 恐らく開発したプレシアさんはこの機体に対する労働、すなわち攻撃は無意味であるという事が言いたかったのだろう。

こう聞けば非常に優秀なISに聞こえるが実際は欠点も多々ある。

一つ、実弾を使った戦闘持続時間が極端に短い事。

二つ、拡張領域をほぼ全て使っているため後付武装による幅広い戦闘に対応出来ない事。

三つ、デバイスによって緩和されているとは言えそれでも高い負担を搭乗者に強いる事。

そして最後に、あまりにも他のISと勝手が違う為に普通のISパイロットには非常に乗りにくい機体になっている事である。
…… 蛇足だが受験生が受かりたいのなら実技試験で選んではいけない機体として本に書いてあった。

光が治まり展開が終わる。

そして視野が広がった、 比喻ではなく本当に。

全てが見えた…… 壁の向こう側…… 周りの人間の目の動きや呼吸音…… 空気の流れといったものまで全てが同時に理解できた、前の番号の人がやや興奮気味だった理由が解るような気がする。

身体は力が漲り、まるで自分が全てを支配出来る様な…… そんな想いすら頭を過りかけた。

そしてそんな想いは急速に冷やされていく。

足りないのだ、なにかが足りない。

力が漲っているのに、なにかが足りない。

足りない足りない足りない、空虚で空っぽで、それがどうしようもなく苦しい。

ISを使っているからこそ解るような何かがあった。
…… レイジンググハートじゃないからかな……？

私は未だに研究機関を転々としている私の本当の専用機レイジンググハートが使えないからだと結論付けて身体の調子を確認する。

両腕で握りしめた一丁の大きなライフルの持ち心地は悪くない、恐らくこれ一丁で数十キロはする筈なのだがISのアシストのお蔭で全く重いとは感じなかった。

まだ喪失感、何か足りないという焦りの様な物はあったが腕や脚は問題なく動くきつと大丈夫だ。

「受験番号798番さん、前の番号の人が帰って来るのを見てから進んでください」

「はい」
「………？」

職員さんに自分の受験番号を言われて返事を返す。

……… ただそれだけの事なのだが、職員さんは首を傾げて何かを言いたげな表情で手元にある資料とにらめっこし始めた。

絶対合格できる、プレシアさんがそう言った理由が書かれているであろう資料に驚いているのかも知れない。

そう考えていると先程意気揚々と飛び出して行った797番の人が帰って来ていた。何でも出来るような気がする、そう言って自信満ち溢れる表情をしていた彼女の面影は何処にも無く、今にも泣き出しそうな表情をしている。

理由は機体を見れば明らかだった。

機体の至るところに塗料が付着している……… 模擬戦用のペイント弾だ。機械だけで当たったか当たってないかを判断すれば必ずごねる受験生が出てくる、そういった諦めきれない人の為に解りやすくしているのだろう。

「798番さん、進んでください」

「あっ……… すいません！ 今行きます！」

番号を言われて慌てて飛び出した。

筆記試験の二の舞にならないようにと決意しながら………。

意外と高い評価をいただけただけで安心した。

試験官は小さな拳銃を拡張領域に仕舞うとブレードを正眼に、まるで剣道の様に構えをとっていた。

「番号と名前を」

「受験番号798番！ 高町なのはです！」

大きな声で答え、照準を合わせて何時でも撃てる様に武器を構える。圧倒的な闘気に飲まれない様に自身を奮い立たせて試験官である彼女を見つめた。

「模擬戦の相手をすることになった、試験官の『八神シグナム』だ。緊張しなくても良い、今出せる全力で挑んできてくれ」

「はい！」

『闇の書』

『守護騎士』

『ヴォルケンリッター』

『烈火の将』

頭に思い浮かんだ様々な役に立たない情報を振り払う様に、私は自らの武器のトリガーを引いた。

実技試験はハードなの!?

なんて…………… デタラメ。

頭上から迫るブレードを紙一重で躲して距離をとる。考えた通りに動いてくれるISに驚くが足を止める訳にはいかない、次は横風ぎ、まるで台風のように繰り出される剣撃を必死に躲していく。

頑丈なライフルでいなし、ISによつてもたらされた運動能力を駆使しているがそれでも避けられない一撃はどうしてもある。

「横に避けて良いのか？ 高町なのは」

「っ……………!?!」

再び繰り出された頭上からの一振りを躲した直後、目の前に壁が見えた。否、壁ではない、打鉄の巨大な足を使ったただの蹴りだ。

真っ直ぐ頭を狙ってきた一撃をライフルの側面で受け止めようと突き出す。が、私の身体はまるで超戦士バトルモノの漫画の様に後方に吹き飛ばされてしまった。

「なんだか…………… デジャブ……………」

違いと言えば武器が壊れていないという点と今度は相手も私もISを着ているという点だろう。

…………… ISの搭乗者があのシグナムさんだと言う事はこの際考えない様にする。深く考えてしまえば心が折れてしまいそうだったからだ。

蹴り飛ばされたのを逆に利用してシグナムさんから大きく距離をとりつつライフルを連射する。轟音が辺りに響き渡りライフルからは幾つもの銃弾が撃ちだされ彼女の下へ殺到した。

『魔法少女リリカルなのは』の剣豪『烈火の将、剣の騎士シグナム』。

原作の続編から登場した一人で、私が知っている知識の中でも指折りの実力者。

原作のフェイトちゃんだって捨て身で挑んでも勝ち星をとるのが難しい程の相手だ、もしシグナムさんが原作通りの力を持っているな

らこの程度の攻撃で沈む訳がない。

躲されるか気にせず突っ込んで切ってくるか………それとも………。

「良い狙いだ、外れている弾が一つも無い」

銃弾を切り捨てるか。

巨大なブレードが横風ぎに振られた。

有り得ないと理性が叫び、当たり前だと心が諭した。一閃で銃弾が全て弾き落とされる光景に思わず笑いが出そうになった。

なんて言うファンタジー……… 私が彼女と同じ世界に住んでい
るのだと思うと嬉しくなる。

でも………。

「実技試験にしてはハード過ぎる気がするんだけど………！」
迫るシグナムさんを遠ざける様に銃弾を撃ち出しつつ後ろに跳ぶ。
ISに搭載されているハイパーセンサーのお陰で後ろの壁までの
距離が解るがその数値がカウントダウンにしか見えなくなってきた
ジリジリと縮んでいく距離にまたもやデジャブを感じた。

視界の端に映る弾数だって心許ない感じがする、装填さの僅かな時
間に切られてしまいそうな予感さえなければ今すぐにも弾を込め
直したいくらいだ。

「すまないな、手加減は苦手なんだ」

突然の返答に心臓が大きく跳ねる。

私の独り言もISの性能の前では駄々もれだった様だ、試験官に失
礼な物言いだったが謝る暇すら私には無い様で正に目と鼻の先にシ
グナムさんがいた。

下から上への切り上げを再び武器で受け止めようとして失敗した。
腕から離れていくライフル、今度は上から下へと降り下ろされる斬
撃を後ろに跳ぶ事で回避する……… 回避しようとした。

「い………っ!？」

肩に走る強い衝撃に私の顔が歪む、切られたのだ。

BJとシールドのお陰で真っ赤な花が咲く事は無かったが、代わり
に感じたのは鈍器で殴られたような強い衝撃。

後ろに跳んでいなければ……そう思い背筋が凍る。

絶対防衛の存在を知ってはいるが割りきれない恐怖というモノはある、第一刃物を向けられて平然としている様な環境で生きてきた訳ではないのだ。向けられる、ましてや切りつけられて何も思わない訳がない。

上空に弾き飛ばされたライフルは大きな音を発てて落ちてきた……よりにもよってシグナムさんの後ろに。

狙ってやったのだろうか？ 間違いなく狙ってやった結果だろう。物理的な距離で言うならそう離れた距離ではないが、私からすれば絶望的に遠い距離になってしまった。

ISを纏った今ならば本当に短い、瞬きの合間にすら拾えるかも知れない短い距離。だがそれも私とライフルの直線上にシグナムさんが立っていないければの話だ。

拾わせる気は無い、そう言っているように立つ彼女。敗北の二文字を頭に浮かばせた自分を叱咤する。

「私が……諦めちゃ駄目だよね……」

彼女はきつと諦めない筈だ、『なのは』ならきつと諦めない筈だ。

思い切り大地を踏み締め走り出す、『ブルー・ロー』の防御性能であればまだまだ大丈夫だと考えて前に進む。

チャンスは一瞬。

降り下ろされる一撃を回避しようと身体を反らす。

ISにより引き延ばされた体感時間で見えたシグナムさんの剣はお父さんの剣よりもずっと遅い、それに私は基本的に距離をとる戦い方ばかりだった、それが今までシグナムさんの剣を躲せてこれた理由だ。

だからこそ、私はこの一撃を躲せない。

でも受け流すくらいは出来る筈だ。

私は身体を反らしてなお私を捉え続けているシグナムさんのブレードを横から殴り付けた！

僅かに軌道がずれるブレード、既にその終着地点は私の身体ではなく地面だ！

「とっ……… た！」

しっかりと右手に握られたライフルを握り再びシグナムさんと距離を離す。

勝った訳ではないがそれでも可能性が消えた訳ではない事に安堵した。

シグナムさんはまだ振り返ったところだ、先程までに比べ明らかに遅い動作に疑問が浮かぶが……… これは紛れもない好機だ。

急いで弾を装填し必死に勝利への可能性にしがみつく。

「当たってー！」

装填が終わり再び私が撃ち始めるまでシグナムさんは此方を見ているだけだった。

銃弾は全て叩き落とされるが予想通りだ、叩き落とすと言っても断続的に撃つのではなく撃ち続ければきつと何発かは当たってくれる筈………？

瞬間、自分の中の警報が鳴った。

「すまない」

シグナムさんが消える……… いや、常識外れな速度で周り込んでくる!?

いつか見たフェイトちゃんの速度にも迫る速さのソレに何とか対処しようとするが刹那の時間に私が動かしたのは首だけだった。

動かした事で見えたモノは、ブレードを振りかぶるシグナムさんの姿。

そして、私に向けられたシグナムさんの瞳には『私』の知らない、向けられた事の無い感情が………。

私が『なのは』になってから向けられた事の無い感情が、『なのは』になる前の『彼』が嫌と言う程に向けられていた感情が籠っていた。

『失望』

衝撃を感じるが斬られたという事にすら考えがまわらない。

失望させてしまった、よりもよって原作にいた彼女を。

私は、私が、私の……私を、『なのは』を失望させてしまった……彼女を……貶めてしまった！

嫌だ……嫌だ嫌だ『なのは』は『なのは』を『なのは』に……『なのは』……

ワタシ
私にしないで……!!



ハンドガンを仕舞ったのは失敗だった……そう私は考え始めていた。

ISを初めて装着した人間は何かしら満たされた表情で此処に現れる、銃と言った容易に人を殺せる兵器や優れたデバイスを持つ人間でさえそういった表情をするのだから今まで中学校に通っていた学生がそのような表情をするのは当たり前だと考えていたのだ。

そんな中一人だけ変わった表情をした少女が、今日の前で逃げ惑っている彼女だった。

満たされないような、そんな顔をしていた彼女に私は少なからず期待してしまっただろう……

ISにアシストされた正確な照準は私を撃ち抜かんばかりに迫ってくる。

正確な照準からなる正確な射撃、試合が始まり暫く経ってなおまるで教科書に載っているお手本の様な射撃に私は僅かに驚き、そして落胆した。

「当たってー！」

ISに初めて乗るにも関わらず冷静を保てる精神、ISにアシストされたとは言えぶれる事の無い照準、そして何よりペイント弾とは言え人を狙う事に対して抵抗が見られない戦おうという意味は評価に値する。

修練を重ね、経験を積み、先へ進もうという意思が消えなければ
きつと代表にだって届く資質を持っている……………。

だが、それだけだ。

両手に握る剣を振る、それだけで私に迫っていたペイント弾は全て
風呂払われた。

それに彼女は特に驚いた様子も無く次々と正確な射撃をしてくる
が私は避けようとする気にもなれなかった。

正確な照準、正確な射撃……………あまりにも教科書通りの射撃は私
にとつては障害にすらなり得ない。

「……………」

彼女には悪い事をしてしまった。

他の受験生と同じく、剣を使わずにハンドガンのみで相手をすれば
良かったのだ。そうすれば今の様なつまらない試合にはならな
かっただろうし彼女も良い試合だったと、勝つても負けても良い思い
出になったに違いない。

——大人気ないからなお前は、それでいて不器用だ

嘗ての目標であり、好敵手であり、今となつては同僚である親友の
言葉を思い出した。

あの時は人の事を言えるのか、と一蹴したが確かに私は不器用なの
かも知れない。

私は何事も……………特に戦いでは手を抜かない、手を抜くという行
為は相手に対して失礼であると考えているからだ。

……………嘗ての後輩、今では先輩になってしまったもう一人の親友
に手加減のしかたを学ぶべき時期なのだろうかとそんな事を考えな
がら時間を見た。

三分経過。

もう充分だろう、彼女は合格だ。彼女の筆記試験での点数は知ら
ないが初めて乗ったとは思えない程の動き、恐らく国や企業の連中は
食い入る様に彼女を見ているに違いない。

筆記試験の点数が幾らだろうが彼女が受からなければ実技試験の意味をお偉い方に追及されてしまうだろう。……………流石に赤点をとってはいないだろう。

だからこそ、今終わらせる。

「すまない」

彼女が最高の待遇をうけられるであろう今こそ彼女を落とすべきだ。

そう判断を下した私は瞬間イグニッション・ブースト加速まで使い彼女に肉薄する。

僅かに首が動き、彼女が私を追おうとしているのが解った。

……………末恐ろしい、見えているのか。

必死になって私の速度に対応しようとしている彼女への評価を上方修正する。しかし、だからと言って結末が変わる事も無く。

私は彼女の背を目掛けて剣を振り抜く。

吹き飛ばされる彼女、己の手に感じる確かな手応えは本物で敵のシールドを削ったのは確かだ。

私は拡張領域からハンドガンを取りだし次の受験生を審査するための準備に入った。

彼女は大丈夫だろう、ISは搭乗者の安全に重きを置いた兵器だ。

この程度で怪我など有ろう筈もない。

視界の隅から彼女に駆け寄る回収班を見て私は安心して……………

纏わり付く様な奇妙な気配を感じた。

直感に従い剣を後ろに振る。

無茶な体勢、そして片腕、力など殆ど入っていない直感的に振った剣から伝わる何か金属と打ち合った様なガキツ……………という硬い音。

「ち……………が……………う」

首を動かして見えたモノは先程とは全く違う彼女の顔だった。

何より違うのは彼女の瞳だ、虚ろな……………濁った……………何処

かで見ただことのある不気味な、本当に不気味で痺ましい見覚えのある彼女の瞳！

刀身に当たっていたのは彼女の持っていたライフルだ、其処から想

像出来ない様な力で剣を押し返した彼女は剣にその銃口を向ける！

「わたしは……………」

発砲、それとほぼ同時に剣から伝わる凄まじい衝撃に思わず剣から手を離してしまう。 瞬間加速を使って後ろに振り向いた私の目に写ったのはやはり、紛れもないあのシルエツト！

——ブルー・ロー！

私は……………！

悔っていたのだ、かの機体の防壁を！

悔っていたのだ、彼女の勝利への執念を！

ハンドガンを至近距離の彼女の頭を狙って引き金を引くがあまりにも遅い、遅すぎた。

構えている者といない者、準備していた者といない者いかに優れていようと絶対的な差を覆せる筈もなく。

乾いた銃声が試合終了の合図となった。

◇◇◇◇

テーブルに置かれたビールを飲みながら彼女は私を見つめ不思議そうにしていた。

「……………」

「お前が飲みに誘うなんて…………… 珍しい事もあると思えば黙るか……………」

織斑千冬…………… 世界最強と言えば恐らく真つ先に名が挙がるであろう彼女。 今でこそIS学園の教師なんぞに収まっているがかつては日本の代表を務めていた。

第1回IS^{モンド・グロツン}世界大会総合優勝および格闘部門優勝者。 そし

て…………… 私の親友だ。

「聞きたい事は私の弟の事か？ 残念ながら私にも解らん、何故アイツがISを起動出来たのか…………… 国のお偉い方にも質問されたが本当に解らないんだ」

「…………… 弟？ そうか、流石千冬の弟だな世界初じゃないか」

国のお偉い方によほど聞かれたのかうんざりだと若干苛立ちながら酒に口をつけようとした千冬が固まる。

「知らなかったのか……？ 確かに何処か上の空だとは思っていたが、まさか聞いてすらいなかったとは」

「すまない、考え事をしていた」

「何があつた？ あまり考え込む様な性格じゃないだろう、お前らしくない」

お前らしくない、確かに私らしく無いかも知れない。

あの試合、彼女と戦つてからどうも調子がでない……… 彼女のあの瞳を見てから。

似ている、似ているのだ、あの瞳はあまりにもアレに似ていた。

「高町なのは……… という名前に聞き覚えは？」

「A&Fの新しいテストパイロットか、あの出来損ないを起動させて話題になった」

「そうか……… 彼女が………」

我ながら私はモノを知らない様だ、流行の話題には疎い方とは思っていたが……… 副とはいえ本当に担任が出来るのかと心配になつてくる。

彼女、高町なのはとの試合の結果は私の勝ちで終わった。最後の一瞬彼女は引き金を引かず、結果的に私の攻撃だけが彼女に通つた。ライフルに弾が入っていなかった訳ではない、彼女は直前に弾を装填していた……… つまり彼女は引き金を引かなかつたのだ。

いや、引けなかつたという方が正しいかも知れない。

気絶……… 最後の瞬間に彼女の瞼は閉じられ意識は残っていなかった。

あの瞳、あの何処か別の何かを見ている様な瞳を私は見たことがある。そしてそれは千冬の方がよく知っている瞳だっただろう。

「……… アレの姉妹や親戚はいるか？」

アレ、それだけで千冬は私が誰の事を言っているのかを理解してくれた。長い仲だ、私がアレと呼ぶ人物が一人しかいない事を解ってくれている。

「………… ああ妹が一人今年入って来てはいるが………… 流石に親戚までは解らないな、どうした？」

「アレと同じ眼をしていた………… 下手をすればアレよりも不気味な眼を」

千冬は瞼を閉じ何かを考えるとバックの中からある書類を取り出してテーブルに置く。

書類の名前の欄には高町なのはの名前があった。

「彼女の履歴書、精神鑑定、その他もろもろの書類だ」

何故彼女がそんな物を持っているのかと彼女を見れば逆に呆れたような視線で見つめ返される。

「入学が試験を受ける前から確定されている特例だ、書類を持ち歩いておけると言われていただろう………… まあ今持っている理由は返す暇さえ無かったただだが」

「すまない、必要無いと…………」

「はあ………… とりあえずコレを見て頭を冷やせ。問題がある娘じゃないだろう、精神鑑定では少々おかしな点が見られたがお前の言う程じゃない」

頭を押さえながら溜め息をつく千冬。

書類をペラペラ読んでいくが確かに突出する様な点は無………… 精神鑑定こそ何処か違和感のある回答があるがそんなものだろう、もっとひどい生徒だつてIS学園にはいる。

「じゃあ私は帰るからな、その書類は明日返してくれば良い」

話は終わりとビールを飲み干し千冬は席を立った。

足取りはしつかりとしている、これなら心配はいらないだろう。

「アイツが………… そう何人もいてたまるか」

そう言い残して行った千冬の後ろ姿は、何故か何時もより小さく見えた。

初登校はドキドキなの

目を覚ました私が見たのは真っ白な天井と真っ白なカーテンだった。

微睡む意識の中、現状を把握しようとして視点を動かせば真っ白なベッドに真っ白な壁…………… 此処が病院である事が想像できた。

…………… あれ？ 何で私、こんな場所にいるんだっけ？

意識がまだ覚醒しきっていないのか何も思い出せない。 流石に記憶喪失なんて大それたものではない、軽いド忘れだと思う。

立ち上がり周りの人に聞いて見ようとして思わず肩を押さえた。

痛み…………… とまではいかないが何か違和感があったからだ。

数瞬の間を置いて思い出す実技試験での出来事。

そっか…………… 私は……………。

「負けちゃったんだ…………… 私は……………」

記憶が途絶える直前に見えたシグナムさんの本当の実力……………

いや本当のというと語弊があるかも知れない。

シグナムさんはきつと試験から戦闘に意識を変えただけ……………

詰まり私はあの時シグナムさんと戦闘すらしていなかったのだ。

戦闘すらできていなかったのだ。

「…………… なんて」

経験が足りなかった、本調子では無かった、レイジングハートじゃ無かった…………… 言い訳を自分に言い聞かせて本当の原因から遠ざかろうとする。

でも、遠ざかろうとすれば遠ざかろうとする程にソレは私に強く主張してくる。

やっぱり…………… 私が……………。

「つう…………… いくらなんでも強すぎやろ!? あれやな！ 私を嫌う誰かの陰謀や！」

暗い後ろ向きな考えが浮かぼうとしたその時、特徴的な関西弁の様な言葉が響いてきた。ビクツと身体を震わせてその方向を見れば誰かがいるのが確認できる。

椅子に座っているのだろう、薄いカーテン越しに見えた誰かの影は小さく頭になにかを押し当てている様に見える。

看護師さん……には到底思えない。いくらなんでも患者が寝ている病室でここまで大きな声で何かに文句を言える看護師はいないだろう。

「はあ………なんでよりもよつて私に実技試験の試験官なんて役目がきたんやろ………私が打鉄なんて碌に操縦できひんのも知つとる筈やのに………ああ、下手やけどちゃんと動かせるからやな」

「試験官………打鉄………？」

最近頻繁に聞く様になった用語を思わず声に出してしまった。

口に急いで手を当てるがもうすでに遅く後の祭り状態で声の主は身体を一瞬震わせて声を再び発した。

「あつちやあ………もしかしなくても聞いたつた？」

「………はい」

「受験生………やな？ あーその、聞かんかった事にしてくれへん？ 結構他の人に聞かせたらアカンような事言った様な気がするし」

「大丈夫ですけど………」

「ほんま!?! 良かったわあ………」

彼女の心底安心した様な声を聞いて色々と頭の中に疑問が湧くがそれらは追求しない事にして取り敢えずは今がいつ頃なのかを聞いてみる事にする。

「すみません、IS学園の方ですよね？ ……私が病院でどれくらい眠ってたのかって解りますか？」

「病院………？ 此処はただの医務室やで？ ……取り敢えず受験生全員の実技試験が終わった所やからあんまり時間は経つてへんと思うよ」

その言葉を聞いてホッと肩を撫で下ろす。流石に何日も寝ていたというのは無いとは思っていたが深夜まで寝ていたらどうしようという思いはあったからである。

娘が真夜中まで帰って来ずに家族に心配をかけてしまうという事にはならないようである。

……それから、関西弁の人は私と少しの間お話をしてお仕事に帰って行った。

何でもこの時期の忙しさはとびつきりらしく、寝る時間もあまり取れないそうだ。

そろそろ私も帰らないと、そう考えて医務室を後にした。

私を探しに来たフェイトちゃんとすれ違いになってしまいしばらくの間、お互いをお互いが探し回ったのは完全な余談である。

筆記試験は赤点、実技試験では試験官に勝てず気絶すらしてしまい職員さんのお世話になる始末。

本当にプレシアさんが言っていた様に合格するのか心配になってくる戦績だが、どうやらちゃんと合格できた様だ。

此処はIS学園の教室の一室、周りを見渡せば女子女子女子、あまり見る事の無かった外国から来た人だつて沢山いる。

入学式を終え職員の指示で各教室に別れた入学生を待っていたのは生徒の名前の書いてある札が置いてある各々の机、そして入学初日特有の暗く霧気だった。

可愛らしく端の方に蝶々が飛んでいる手作り感満載の名札は制服に着けると言いたいのか安全ピンが刺さっている。

暗い霧気の中、入学初日でお互いの事なんて解らないが恐らく皆の思考は一つだっただろう。

———今、コレを着けたら何か取り返しがつかなくなる。

入学初日、それも第一印象というのは大事だ。暗い奴ならまだ良い、後からいくらでも挽回する事は可能であるし容易いだろう。印象を暗い奴から大人しい奴に変える事はそう難しくない。

勿論、明るい奴というイメージを持たれる事が一番なのは確かだ。友達は暗い奴よりも遥かに速く多く出来るだろうし友達から友達の友達が友達になってくれる事だつてある。……………しかしそれは自分の性格と一致していればの話だ。

本来は暗い人間、大人しい人間が無理をして入学初日に明るく振る舞えばどうなるか……………ボロが出れば初めは多かった友達はやがて第一印象とのズレで段々と数を減らしていくだろう。何故なら彼らが求めていたのは明るい人間であつて暗い人間では無いのだから。ボロを出さなかつたとしても今度は自分にとって耐え難いストレスになるだろうし無理して続ければ精神的に病んでくることは間違い無しだ。

入学初日、それも散々苦勞して入つたであろうIS学園でそんな間違いを犯す愚か者はいなかつた。

重苦しい雰囲気何とか和らげたくて親友の姿を探す。同じクラスであつてくれと神にも祈る思いで探せば直ぐ左後ろに彼女の姿はあつた。

「良かった……………同じクラスだつただねフェイトちゃん」

「うん……………あれ？　なのは、もしかして掲示板見て無かつたの？」

「……………緊張して自分の名前探すのに精一杯だつたよ」

苦笑いしながら頬を掻く。正直な話、女性として長い間生きてきたが未だに知らない女性が沢山いる中に交ざるのは苦手だ。性欲だとかそういうモノは感じないのだが気恥ずかしいというか場違いというか、とにかく居心地が悪くなってしまう。

まあ居心地が悪いというのはこの教室もだが。雰囲気が暗い事、さらに女性だらけという点でもこの教室は私にとってあまり居心地の良い場所じゃなかつた。

「やっぱり知り合いが一人いると全然違うね……………さつきまで居心地が悪くて……………」

「あ……………なのは？　私だけじゃ……………」

「え？」

そう言つて右を指差すフェイトちゃん。そのまま視点を動かせば、私の列の後ろの辺りに大人しそうな女の子、私の親友の『月村すずか』ちゃんが居た。

IS工学関係に進むという事は聞いていたがまさかIS学園に、それも同じクラスだとは思わなかった。

すぐにでも話しかけたいが距離が少し離れているため流石に声で話す事はせず小さく手をふるだけですませる。

すずかちゃんは何故か困った様な顔をしながら手を振り返してくれた後に更に右を指差した。

流石にこれ以上首を曲げる訳にもいかず今度は首を右に曲げてみれば………不機嫌さが爆発しそうなくらい貯まっている事が解る表情をした『アリサ・バニングス』ちゃんがこつちをガン見していたのだ。

見ていた、なんて生易しいものではない、ガン見、ガン見である。

如何にも私不機嫌です、と言いたげな感じでじいっと此方をみてきていた。

私、アリサちゃんに何かしたかな………と考えて見るが全く見に覚えがない。

そもそも最近は何忙しく会う事も出来なかったのだ、色々な精密検査に書かなくちゃいけない沢山の書類………そのあとはISの勉強。それにアリサちゃんも受験勉強で忙しかった筈だ。

もしかしたら同じ教室だと言う事に全く気づかなかったせいだろうか？ ……あながち間違いでも無いかも知れない。

そう考え直ぐにでも謝ろうとした私を遮る様にドアの空く音が聞こえて誰かの歩く音、振り返ろうとした途中で声がした。

………そして、振り返って固まった。

「みんなおはような！ 私が今日からこのクラスの担任をする事になった『八神はやて』や！ みんななかよーしてや！」

『八神はやて』原作の次回作でのもう一人の主人公とも呼べる少女、幼い頃から下半身に障害を負っていて……………。

其処まで考えて思考を中断した。

また悪い癖だ、現実と妄想の区別が未だにはつきりとしていないからこんな事を考えてしまったのだ。

小さく頭を振って思考を切り捨てる、何が下半身に障害を負っているだ…………… 彼女はきちんと立っているじゃないか。

…………… しかし若い、本当に教師なのだろうか？ 見た目年齢で言うなら私たちと同じ年にも見えた。

私の両親といいプレシアさんといい…………… 私の周りの大人は揃いも揃って老化という言葉を知らないに違いない。

やがて話はお決まりの自己紹介に移っていく、クラス一人一人の自己紹介にややオーバー気味な反応をするはやてちゃん…………… はやて先生に場の雰囲気は少しずつ和んでいくのを感じた。

「うんうん、先生もシュークリームは好きやで！ 外の生地と甘いクリームのハーモニーが…………… つととあんま話しとると時間が無くなってまう…………… 次は…………… 『高町なのは』ちゃんの番や！」

「んや!？」
シュークリームの味を想像していたのかうつとりとした表情を浮かべた彼女はビシツという擬音が目に見える様な勢いで私を指差した。

勢いに押され思わず奇妙な声を上げてしまった私にクラス中から小さく笑い声が聞こえた様な気がするが気のせいだと信じる。信じたい。

「たっ…………… 高町なのはです！ 趣味はお菓子作りで…………… え…………… ISの事については最近学び始めたばかりで解らない事の方が多いですがよろしくお願いしますー」
「噛んでしまったし詰まっちゃった……………」

「お菓子作りかあ…………… もしかしてシュークリームとか作れた

りするん？」

「えっ…………… はい、多少は……………」

「今度先生にも作ってくれへん？ みんなは知らんやろうけど先生シュークリームが好物なんよ…………… え？ 知つとる？ みんなエスパーやなあ」

気にした様子もなく、はやて先生は次々とクラスの自己紹介を進めていく。

やはり全世界から生徒が集まる I S 学園だけあって呼ばれる名前は多種多様、アニメなんかで登場しそうなカッコいい名前から発音の難しそうな名前まで選り取り見取りだ。

必死に覚えよう頭をフル回転させるが頭の中に全く入って来ない…………… クラスの名前を半分も覚える前に自己紹介は終わってしまう。

覚え切れなかった名前を確認する為に後ではやてちゃんに…………… はやて先生に出席簿でも見せて貰おうと考えた。 仮に見せて貰えなかった場合でも彼女の事だ、きつと何か代わりとなる案を教えてくれるに違いない。

「き、次はクラス代表を決めなあかな。 積極性のある子は好きやけど此処は I S 学園、クラス代表には勿論そう言った役割が多くなるから気を付けてな」

そう言った役割、つまり I S を用いた戦闘等の事だろう。 学園の教育目的を考えれば可笑しな話ではない。

私は I S の強さで言えば恐らくフェイトちゃん、リーダーシップ的なモノで言えばアリサちゃんかなと考えながらボンヤリと周りの話を聞く。

「はっ」

手が上がった。 声のした方向を見てみれば手を上げたのはアリサちゃんだ。

フェイトちゃんは少しだけ引っ込み思案な所もあるから手を上げるとすればアリサちゃんかなあ？ 何て考えていたら見事に的中。

中学校の頃と同じ様にきつと皆を引っ張って行ってくれるに違い

ない。

「私は高町なのはさんを代表に推薦します」

……え？